

「確かな学力」を育成する「わかる楽しい授業」づくり

自己評価能力を高める学習活動の研究を通して

中土佐町立上ノ加江中学校 教諭 上西 由美子

本研究では、「確かな学力」の育成につながる「わかる楽しい授業」について明らかにしたいと考え、生徒の自己評価能力を高める指導と評価のあり方について、国語科の「書くこと」の領域を中心において研究を進めてきた。

生徒につけたい力を明確にし、診断的評価を生かして授業を計画するとともに、ルーブリックや自己評価表を活用して形成的評価を行った。そのことにより、メタ認知能力、主体的な学習活動、個に応じた指導の視点が有機的に関係づけられ、生徒が「わかる楽しい」と実感する授業が実現した。

キーワード：自己評価能力、ルーブリック、個に応じた指導、わかる楽しい授業、書くこと

1 はじめに

現行の「学習指導要領」では、基本的なねらいである「生きる力」の知の側面として「確かな学力」育成のための取組の充実が求められている。

その実現のためには、国語科の授業においても、基礎的・基本的な内容を確実に習得させることに加えて、主体的な学習活動を仕組み、生徒が自ら学習を振り返り、自らの学習活動の改善を図ったり、軌道修正できるような自己評価能力を高めることが重要であると考えます。

第2期土佐の教育改革の検証の年を迎えた本県においても、「基礎学力の定着と学力の向上」は、第1の柱、最重要課題として掲げられ、これまで「わかる楽しい授業」づくりに向けての一層の授業改善、指導力の向上が求められてきた。授業を通して、生徒がわかる喜び、学ぶ楽しさを体感することが、「生きる力」につながる「確かな学力」となると考える。

そこで、これまでの実践の課題も踏まえ、国語科でつけたい力を明確にし、評価をどのように生かし機能させていくかという視点から、指導と評価のあり方について研究を進めてきた。

2 研究目的

本研究では、ルーブリックを活用した「書くこと」の実践例を提示するとともに、「つけたい力を明確にした主体的な学習活動を工夫し、個に応じた指導を行うことで、生徒の『自己評価能力』の向上と『わかる楽しい授業』の実現が期待でき、『確かな学力』がはぐくまれるであろう。」という研究仮説の有効性を検証することを目的とした。

3 研究内容

(1) 国語科でつけたい力の研究

歴史的変遷の考察から

昭和22年以降の国語科のカリキュラムの変遷をたどり、日本の国語科教育が、それぞれの時代の中でどのような力を子どもたちにつけようとしてきたかを確認することで、今の時代に求められる国語力についての理解を深めた。

戦後の経験主義重視の時代から、系統的指導重視の時代、学習内容の精選、ゆとりと基礎・基本重視の時代への移り変わりとともに、国語科の目標は変化し、指導事項の重点化が図られている。平成元年には、「情報化時代」に対応できる子どもたちの育成が掲げられ、現行の「学習指導要領」では、「社会生活に必要な言語能力を確実に育成することを重視」して、新たに互いの立場

や考えを尊重しながら言語で伝え合う能力の育成が重視されている。「伝え合う力」は「理解」と「表現」の相互関係として位置づけられ、音声言語と文字言語との両面を含む言語能力である。これからの情報化、国際化の時代に「生きて働く国語の力」として、「伝え合う力」はまさに、国語科において身につけさせるべき「生きる力」につながる「確かな学力」であると認識したい。

教育心理学の理論から

人間の発達をいくつかの段階に分ける発達段階については、ピアジェ、フロイト、エリクソンらの発達理論がある。その内容や段階の区分、呼称には差異はあるものの、人間の発達に段階があることは疑いようがない。人間の発達段階に照らし合わせてみると、「学習指導要領」に示された内容は、各学年、各学校段階で学習するのに適当な内容であると理解できる。例えば、中学生の時期は、抽象的・論理的な思考が本格的に展開する時期であるとされているが、中学校国語科における指導事項は、まさに中学校段階で学習するのに適当な内容であると考えられる。国語科においては、どの指導事項にもとづき、どのような言語能力を育成するかが重要である。その言語能力について考える際に、各学年、各学校段階における発達段階を踏まえた系統性を意識することが、当該学年で身につけさせたい力の明確化につながると考え、つきたい力の一覧表（小中の系統表）を作成した。

ルーブリックについて

評定尺度とその内容を記述する語から成り立つルーブリック（評価指標）をあらかじめ設定しておくことは、指導と学習にとって具体的な到達点の確認と次への指針となる。教師にとっては、ルーブリックづくりはカリキュラム研究という側面も持ち非常に意義深い。また、子どもの学習到達のレベルを質的な面から判断できる、あるいは数値化することで評価の妥当性が高くなるなどの利点が考えられる。

「学習指導要領」をもとに「学習指導要領解説」及び「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）」（平成14年2月 国立教育政策研究所教育課程センター）を参考にして、「意見文を書く」ことを想定してルーブリックづくりを行った。子どもの実態から目標をとらえなおす、いわゆるボトムアップの方法を試行する中、二つの課題が明らかになった。

まず1点目は、生きて働く国語の力を育成し評価するためには、子どもの実態に合ったより具体的な「つきたい力」を系統的に整理することが必要であるということである。

そして、2点目に、ルーブリックの信頼性と妥当性を高めるためには、実際の生徒の作品や様々な言語活動を、複数の教師で見取り、判断基準を付き合わせるという作業が必要であるということである。そのような作業を通してこそ、より具体的なスタンダード（標準）が明確になっていく。

そこで、在籍校の国語担当教諭に協力いただき、1学期に書かれた生徒の「人権作文」をもとに、モデレーションを行った。

モデレーションとは、評価資料となるワークシートや作品などを待ち寄って、評価の調整を行う会議のことであり、評価の客観性を図るのに有効である。

生徒の「人権作文」を用いて、「発想や認識」「事柄や意見」「構成」「記述」の四つの観点についてモデレーションを実施した。その手順として、2人の教師がそれぞれの観点について3点法で採点したものの平均を出し、平均点順に並べたものをABCに分けた。そのうえで、「Aを実現している状態」「Bを実現している状態」「Aを実現するための手立て」「Bを実現するための手立て」をそれぞれが付箋に書いたものを作品に貼り、分析を行った。その結果、生徒の実態から驚くほど明確な判断基準が浮かび上がった。そこで、当初作成していたルーブリックをより具体化し、「意見文のルーブリック」を開発した。（表1）その信頼性、妥当性にはまだまだ検証の余地があるが、これは、モデレーションの手法が生徒の実態の分析と判断基準の作成に有効であることを示すものであった。

表1 「意見文のルーブリック」

レベル		発想や認識	事柄や意見	構成	記述	推敲	評価・批評
5	身近な題材にとどまらず、社会生活全般に目を向け、ものの見方や考え方を深めている。自分の意見や考え方を明確にし、その根拠を広い範囲から収集している。考えたことを行動化し、生活を豊かにしようとする姿勢が見られる。書き出しの工夫や、呼びかけなど効果的な構成を工夫し、読み手に訴えかけ説得力のある内容となっている。500字程度の文章が書けている。	自分が見つけた課題について、相手や目的に応じて、コンピュータや図書などの資料を集めたり、インタビューしたりして、自分の考えやもの見方を深めている。	自分の意見や考えをはっきりさせ、意見を支える説得力のある事実を二つ以上選んで書けている。	自分の立場をはっきりさせ、自分の意見に対する反論の予測があり、自分の主張に説得力を持たせるための効果的な展開を工夫している。	自分の意見を裏付ける根拠(内容)が客観的で正確である。また、反対意見にも受け入れられ、さらにより方法を提案する視点が見られ、説得力のある文章になっている。500字程度の文章が書けている。	自分の書いた文章を読み返し、～の～を点検できる。さらに、より効果的に伝わるために、よりふさわしい語句がないか、結論に導くための根拠や理由の取り上げ方や述べ方、そのための材料の活用の仕方について検討できる。	友達の文章を読んで、左のことができる。また、自分の意見文の参考にできる。
4 (到達目標)	経験や事実を通して、自分の立場や意見を明確にしている。読み手にわかりやすい文章構成となるよう記述している。400字～500字程度の文章が書けている。	自分が見つけた課題について、友達の意見を参考に、自分の考えやもの見方を深めている。	自分の意見や考えをはっきりさせ、意見を支える事実を一つ～二つ書けている。	自分の考えの中心をはっきりさせ、反論を予測し、筋道の通った分かりやすい文章が書けている。	自分の意見を裏付ける根拠(内容)が書けていて、伝えたいことの中心が何かわかる文章になっている。400字～500字程度の文章が書けている。	自分の書いた文章を読み返し、～に～を点検できる。伝えたいことが十分書けているか。足りないことや、よけいなことはないか。読み手に分かりやすい構成になっているか。材料の並べ方はよいか。段落と段落とのつながりは適切か。	友達の文章を読んで、左のことができる。
3	経験や事実と自分の意見を区別して、文章の構成を意識して書けている。400字程度の文章が書けている。	自分の課題について自分の考えを持つことができる。	自分の意見や考えと事実を区別して書けている。	段落のまとまりを意識して書けている。	400字程度の文章が書けている。	自分の書いた文章を読み返し、次のことを点検できる。 ・常体と敬体が混じっていないか。 ・主語と述語が整っているか。 ・漢字の間違いや、仮名遣いのおかしいところはないか、句読点()・「」などの区切り符号の使い方は適切か。 ・原稿用紙の使い方は適切か。	友達の文章を読んで、左のことができる。
2	これまでの経験や事実が書けており、自分の意見も見られる。400字程度の文章が書けている。	自分の書きたいことを見つけることができる。	自分の意見や考え、事実を書けている。	何段落かに分けて文章が書けている。	いくつかの文が書けている。	自分の書いた文章を読み返すことができる。	友達の文章を読むことができる。
1	これまでの経験や事実を400字程度の文章にできる。						
*	作文が提出できない。						

(2) 自己評価能力を高める学習活動の研究

メタ認知能力について

自己評価能力を育成することは、自己を統制していくといったメタ認知能力を高めるということである。生徒たちが、学習活動の中で目標を明確にしなが、常にその目標に照らして自己の点検を続け、今行っている活動を続けるのか、あるいは改善するのかといった判断や調整をする能力が求められる。

そこで、自分の学習状況に気づき、学習の改善や次の目標につながる自己評価表のあり方と活用、再思考を促す相互評価や支援的対話のあり方について、研究を進めた。

主体的な学習活動について

また、自己評価能力の育成のためには、生徒が主体的に学習し、自らの学習状況を確認し評価するとともに、他者評価によって自己評価が強化されるような場面設定が必要であると考え、主体的な学習活動のあり方に着目した。

現在言われる主体的な学習は、授業での子どもの学習を主体的・能動的なものにしていく取組の総体をあらわすとされている。

村上氏は、「主体的学習」のねらいを「単なる方法論ではなく、目的は明確な主体性を持つ人間性の育成」(*)であると述べている。さらに、「個人の主体性を育てる指導」「学級集団の主体性を育てる指導」「教師が主体性を発揮する指導」を展開し、生徒、生徒同士、教師がそれぞれ主体性を発揮し有機的に統合的に学習が行われるとき、子どもたちの主体性が確実に育っていくとしている。このことは、学習活動の展開において、個人で思考する時間を確保すること、判断力を強化するための協学習や教師による指導や支援をより意識することが重要であることを再認識

させてくれる。

特に、生徒同士の協力学習の視点であるが、村上氏は主体的であることを自主的であることと区別して、自主性を基礎概念と考え、それに価値概念が導入され展開した概念として主体性を押さえている。自主的であることが自ら進んでやることにとどまっているのに対し、主体的であることは、そこに価値的な判断が加わる。その判断力を強化するために、メタ認知能力の向上が必要であろうし、メタ認知能力の強化には他者評価が有効である。主体的な学習活動を成立させるうえで、ルーブリックによって判断基準を明確にし、生徒同士の相互評価や教師との対話に着目したい。

また、主体性を育成するためには、学習は自分自身がすることを自覚させ、学習の主体と指導の主体を明らかにすることが必要である。その実現のためには、生徒に学習の目的を理解させること、そして、学習の有用性を感じさせること（実の場の設定）などの内発的な動機づけが重要であると思われる。それは、何のために学ぶのかという学問（教科）の本質に迫ることであり、学んだことが生活の中にどのように生かせるのかを実感させることである。

個に応じた指導

一人一人の自己評価能力を高め、確かな学力を身につけさせるためには、これまで述べてきたような視点に加え、さらに、診断的評価や形成的評価を生かして、一人一人を生かす評価活動のあり方を考える必要がある。

(3) 指導と評価の実際

診断的評価を通して

授業を計画する際、つけたい力と生徒の実態を照らし合わせ、教材や指導法を決定することが、より効果的な学習につながる。

右のような観点(図1)で行った診断的評価の結果から、一人一人の生徒の学習の状況やつまずきの原因を分析することで、年間指導計画の修正、指導と評価の計画の作成、ワークシート、手引きの工夫をし、個に応じた指導が可能となった。

ア 年間指導計画の修正

当初、「推敲」「評価・批評」の観点について重点的に指導しようと考えていたが、まずは書き方の指導の必要性を感じ、計画を修正した。

イ 指導と評価の計画

意見文のルーブリックの作成とともに、単位時間ごとの到達目標と判断基準を明確にした計画表を作成した。

ウ ワークシート、手引きの工夫

生徒の実態をおおよそ三群に分け、一枚のシートをそれぞれの習熟に合わせて活用できるよう工夫した。

また、基礎・基本の定着とともに、それを活用する力、すなわち「確かな学力」を目指す学習活動の展開として、単元の前半は知識や技能の習得型学習、後半は個別探究型学習を行った。

さらに、実の場を設定することで生徒を意欲的に作文に向かわせたいと考え、テーマは「よりよい学校にするために」とし、全校生徒に自分の意見を発信する場を設定しておいた。(図2)

【観点】

先行学習の状況
発達段階の程度
課題に対する抵抗度
本人の学習に対する意欲や態度
学級集団との関係
教師との関係

図1 「診断的評価の観点」

「事実」と「意見」を区別する
(事柄や意見) ワークシート

意見文のテーマを決める
(発想や認識) KJ法

意見文の組立てを理解する
(構成・記述) 教科書の意見文

構想メモに記入する
(構成) ワークシート・手引き

【習得型学習】

意見文を書く

【個別探究型学習】

発信する

【実の場の設定】

図2 「授業の流れ」

形成的評価を通して

ア ルーブリックの活用

下の写真は、生徒がルーブリックを用いて自己評価、相互評価を行った後、清書をしている様子である。自己評価では、ルーブリックにもとづき、ルーブリックの項目と作文に表れた実現状況が重なるところに線を引かせた。続いて、同じルーブリックにもとづいて、友達の作文を評価させた。ピンクの付箋に良い点、水色の付箋に改善点、黄色の付箋に疑問点を書くよう指示した。この三つの立場を設定するという相互評価の手法は、評価者自身の発想や認識の広がり、思考の深まりのうえでも有効であった。また、同じ方法で、教師も評価を行った。これらの活動の結果、清書時には、主体的に推敲を重ねる生徒が多く見られた。



写真 「ルーブリックを活用した学習活動」

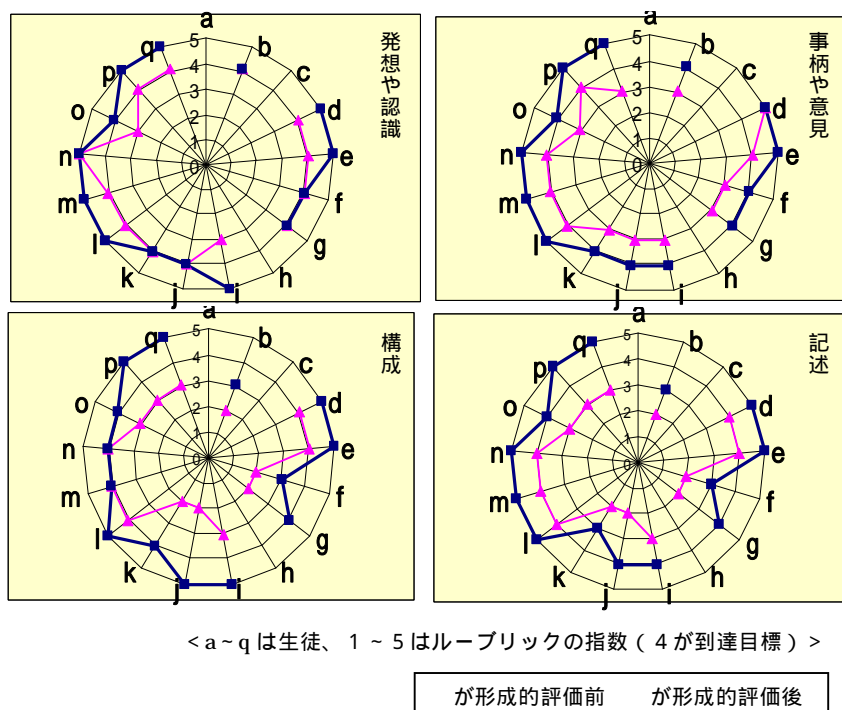


図3 「形成的評価前後の生徒の書く力の変化」

また、他者からほめられたり、認められたりすることによって、生徒の自己肯定感が高まり、より意欲的に学習に取り組む姿勢も見られた。学習活動を仕組むうえで、ほめる場面をつくること、相互評価を行えるクラスの土台づくりが重要である。

以上のような自己評価、他者評価を用いた形成的評価を行った結果、自己評価能力の高まりとともに、「書く力」の向上が見られた。(図3)

事後の意識調査によると、全生徒が、ルーブリックは「役に立った」と答えており、全体の7割の生徒が、ルーブリックを使うことによって「自分のできなかったところや改善点がわかった」としている。

ルーブリックを用いて自己評価を行うことは、生徒のメタ認知能力を高めるのに非常に有効であった。また、相互評価においても、判断基準を共有できるという点で、効果的に再思考を促すことができた。生徒は、友達からの評価に敏感であり、自己評価能力を高めるうえで、相互評価が非常にプラスの要因となることを再認識した。

イ 自己評価表の活用

自己評価表が、生徒の自己評価能力を高めるものとして機能するよう、自己評価表の手引き（図4）を作成した。生徒に自己評価の意義を伝え、授業の振り返り方を教えることで、情意面、認知面においての高まりが感じられた。また、目標の達成度について明確な判断基準を示し、自己評価表を通して対話することにより、生徒の自己評価能力が向上することも確認できた。（図5）（図6）

自分の学習を記録しよう！（自己評価表の書き方）

毎日の授業、楽しいですか？「勉強、わからん」「やらされゆう」「しようがない」と思っているのは、苦痛です。力も伸ばせません。「みんながわからぬ楽しい授業をする」ということは、まずは、授業を受け持たせてもらっている先生の責任です。しかし、先生一人の力だけでは完全ではありません。授業は、みんなと先生で作るものです。そこで、先生も努力しますので、みなさんも、こんなふうに授業に臨みたいということをおぼえておきましょう。

まずは、自分の状態を知ることが大切です。そして、どうしたら今よりよくなるか、その方法を考えてみましょう。友達の見解を参考にしたり、先生にアドバイスをもらうのもいいですね。さらに、どういふことができるようになりたいかという自分の目標を持つようになれば勉強は100倍楽しくなります。

*休み時間中に次の時間の準備はできていましたか。
*授業で必要なものはすべてそろっていますか。

*バタバタ走り込んでギリギリセーフなということがあります。授業中は席に着いて聞きましょう。心も体もしっかり勉強モードに。

*あいさつは心と心をつなぎます。友達や先生と楽しく気持ちのよい時間をつくりましょう。

月日	校時	準備はできていますか	授業で必要なものはすべてそろっていますか	学習の目標	学習の振り返り
		4 3 2 1	4 3 2 1		
		4 3 2 1	4 3 2 1	達成度 4 3 2 1	

*自分はこうしたい、自分はこうなりたいと考える、行動（学習）できたか。

*積極的にできたか。
*進んでできたか。

こんなことが書けるといっしょです。

①わかったことやできるようになったこと。	④どうしてわかった（できるようになった）のか。	⑦友達や先生との考えの共通点や相違点。いいなと思ったことや参考になったこと。
②わからなかったことやできなかったこと。	⑤どうしてわからなかった（できなかった）のか。	⑧次の目標や次の時間にはこうしたいと思うこと。
③疑問に思ったこと。	⑥がんばったこと。	⑨困難を克服してよかったことや今後生かせること。

図4 「自己評価表の手引き」

自己評価表を活用するにあたり、生徒が自己評価表に記入する時間、教師が点検する時間の確保が当初の課題であった。

実際の授業において、時間確保が難しい日もあったが、毎日続けることで、生徒は確実に、素早くて確かな自己の振り返りができるようになっていった。

また、書くことへの抵抗感も減っていったようである。

さらに、教師自身も、「つきたい力」、
「判断基準」を明確に持つことで、素早くて確かな見取りができることを実感した。

自己評価表の意義として、生徒の自己評価能力を高めるとともに、教師の評価能力を高めるものとしても機能することが確認できた。

自己評価表 () 氏名

単元の目標 文章を書くことが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。

月日	校時	準備はできていますか	授業で必要なものはすべてそろっていますか	学習の目標	学習の振り返り
11/7	2	X	O	事実と意見を区別 いいもの悪いものの中には、2つと区別がつかないものがある。 達成度 4 ③ 2 1	自分の意見を相手に伝えることが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。
11/8	2	X	O	意見文の構成 「あはれ」 達成度 ④ ③ 2 1	自分の意見を相手に伝えることが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。
11/9	2	O	O	自分の意見のテーマ 「あはれ」 達成度 ④ ③ 2 1	自分の意見を相手に伝えることが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。
11/11	2	O	O	自分の意見のテーマ 「あはれ」 達成度 ④ ③ 2 1	自分の意見を相手に伝えることが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。
11/11	3	O	O	自分の意見のテーマ 「あはれ」 達成度 ④ ③ 2 1	自分の意見を相手に伝えることが、お互いの意見を交換することを通して、自分の考えをしっかりと相手に伝えようとする。

図5 「自己評価表を通しての対話」

11/8の目標と判断基準

目標：意見文の組立てがわかる。

- 4：四つの意味段落に分けることができ、段落相互の関係についても理解している。
- 3：四つの意味段落に分けることができる。
- 2：いくつかの意味段落に分けることができる。
- 1：意味段落について理解できていない。

「意見文の組立てがわかる」という目標に対して、M君は達成度が「3」という自己評価をしていた。しかし、授業観察からM君は、意見文の組立て（意見・根拠・予想される反論とその答え・意見）のキーワードを十分理解しており、さらに、「学習の振り返りの記述」を見ると、「予想される反論とそれに対する答えを考えるのが難しそう」と、実際の作文を書くことまで想定できていた。これらの根拠を説明し、今日の評価は「4」であると伝えた。以後、徐々に自信をつけ、正確な自己評価ができるようになり、学習意欲も高まったように思う。

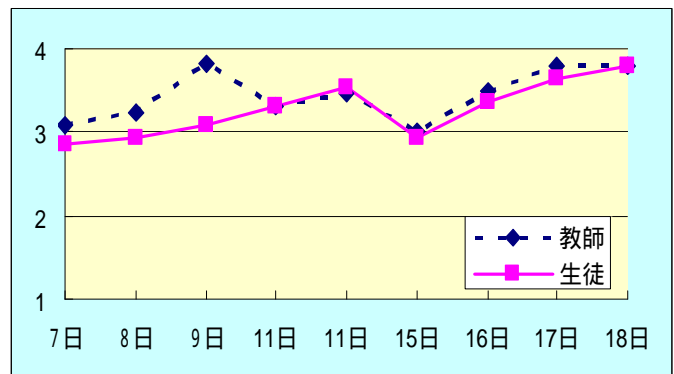


図6 「目標の達成度についての生徒と教師の評価の比較」

(4) 仮説の検証及び考察

「わかる授業」について

「授業がわかりましたか」という質問に対し、事前と事後を比較してみると、「わかる」とした生徒が大幅に増えている。(図7) さらに別のアンケートでは、すべての生徒が「授業でできた、あるいはできるようになった」と実感できる場面があった」と答えている。これは、目標や判断基準を明確にしたことで生徒のメタ認知能力が向上し、「わかる」ことを生徒自身が自覚できたためではないかと考えられる。

また、今回の授業で取り組んだ意見文の評価は、すべての生徒が評価規準のBを達成することができた。(図8)これは、つけたい力を明確にしたうえで、ルーブリックを用いて自己評価、他者評価を行うという授業展開が有効であったことを示している。

「楽しい授業」について

授業前後の「授業の楽しさ」の意識調査の結果を考察すると、「楽しい」とした生徒が大幅に増えている。(図9)そして、「楽しかった理由」として、「先生がおもしろい」から「授業が楽しい」という傾向にあった生徒たちが、単元終了後には「学習内容がわかる」ということを「楽しさ」の一番の理由に挙げている。さらに、「思いを伝え合うことができる」「成長を感じられる」「今後の課題を見つけられる」といった理由から「授業が楽しい」と感じる生徒が出てきたこと(図10)は、「確かな学力」につながる授業への変革と、生徒の意識の変容として挙げられるのではないかと考えられる。

さらに、授業観察から、生徒同士の交流や他者から認められることが「楽しさ」につながることもつけ加えておきたい。

自己評価能力について

単元の学習終了後の生徒の振り返りの記述を分析すると(表2)、生徒の自己評価能力と学力の向上には、関連性があり、今後の目指すべき方向が見えてくる。今回の研究では、まず、目標や判断基準を教師が設定することにより、「わかる、できる」という認知面が向上することによって、「楽しい、好き」という情意面や「進んで行く」という行動面の向上が見られた。しかし、学習の終盤になると、生徒の中には、自分で目標を設定できる者や今回の学習を他の場面でも生かせないかと考える生徒が育ってきた。そういった点で、ルーブリックを用いた主体的な学習活動の展開は、生徒に学

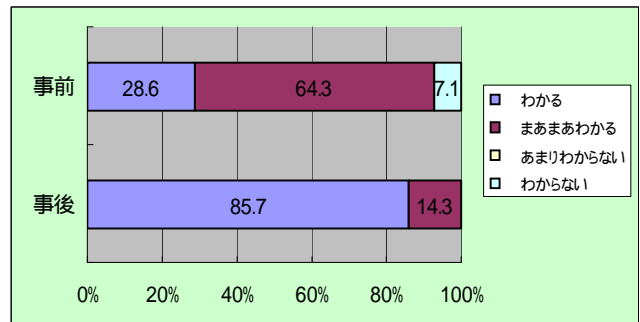


図7 「授業はわかりましたか。」

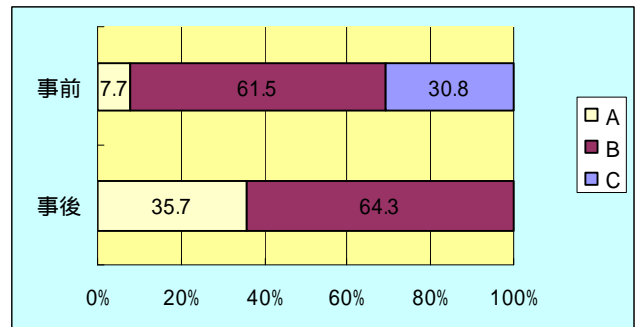


図8 「診断的評価として用いた作文と今回の意見文の評価」

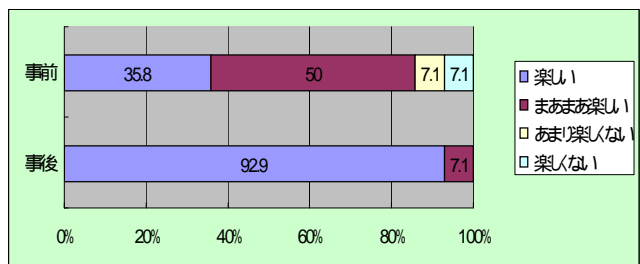


図9 「授業は楽しかったですか」

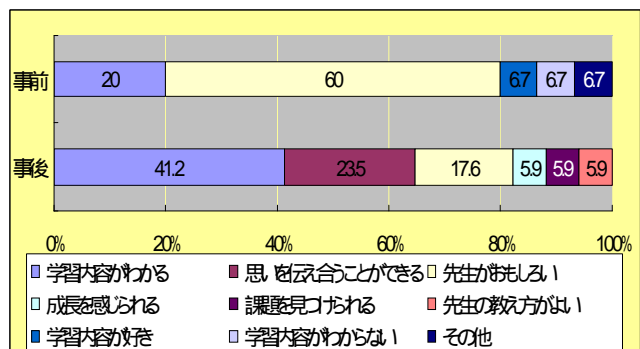


図10 「授業が楽しかったのはなぜですか」

び方を教えることができる活動であったのではないかと感じている。次の段階としては、生徒自身が目標や判断基準の設定ができることを目指したい。その姿こそが、自ら学び自ら考える生徒として最終的に目指す生徒像であると考えている。

表2 「単元終了後の生徒の振り返りの記述の分析」

学習内容を理解し、次の課題を設定している。 (今回の学習を今後の学習や生活に生かそうとしている。)	28.6%
学習内容を理解し、自分の成長を確認している。	50.0%
学習内容が理解できたことを自覚している。	78.6%
具体的ではないが、わかった、楽しかったと感じている。	21.4%

4 まとめ

今回の研究から、メタ認知能力の視点、主体的な学習活動の視点、個に応じた指導の視点を有機的に関係づけることで、生徒の自己評価能力は高まり、生徒がやってみようという気持ちから、わかる楽しい、そして、今度はこうしたいという気持ちへと変容を見せるような「わかる楽しい授業」が実現され、「確かな学力」が育成できるという一つの結論を得た。

成果としては、次のようなことが挙げられる。

ルーブリックを活用することで、生徒と教師が判断基準を共有できた。そのことにより、学習結果の速くて的確なフィードバックと個に応じた指導が可能となった。
ルーブリックは、生徒のメタ認知能力を高めるためのツールとして有効で、生徒の自己評価能力向上に役立った。学習の目的や自己評価の意義を説明し、学習の主体が生徒自身であることを自覚させ、学んだことが生活に生かせるという経験をさせることは、学習に対する意欲を高めるうえで、非常に有効であることを再確認した。
生徒は「考えること」や「よりよくすること」により一層の楽しさを感じる事が実感できた。これまで主体的な学習活動の場を設定できなかったことを反省するとともに、今後の授業のあり方を考えることができた。
診断的評価を分析的に行い、計画的に指導と評価を行うことで、一人一人の生徒が「わかる楽しい」と実感できる授業が実現するという可能性を得た。
ルーブリックづくりは、教師の単元の創造力や指導力を向上させる点でも有効であることがわかった。

また、課題としては次のようなことが挙げられる。

学習指導要領にもとづき、単元の目標を明確にしながルーブリックづくりを行った。しかし、その妥当性・信頼性については、実践のなかで高めていく必要がある。
今回の検証授業では、教師がルーブリックを作成したが、最終的には、生徒自身が適切な判断基準を設定し、主体的に学習に向かっていけることを目標に、自己評価能力の指標や評価方法についてさらに追究する必要がある。
今回の授業は、「書くこと」の領域において行ったが、より効果的な指導を実現するためには、他領域や、他教科等との関連を図りながら、国語科の年間指導計画を立て実践していく必要がある。

今回の研究の成果と課題を今後を生かし、豊かな生活を送れる生徒を育てられるよう、一人一人の生徒の言語能力と自己評価能力を高める指導と評価のあり方についてさらに研究を深めたい。

【引用・参考文献】

- * 「主体的学習体系1」(村上 芳夫 明治図書 1975)
- ・ 「学力と評価の“今”を読みとく」(田中耕治 日本標準 2004)
- ・ 「絶対評価とルーブリックの理論と実際」(高浦勝義 黎明書房 2004)
- ・ 「教育課程の改善の方針、各教科等の目標、評価の観点等の変遷」(国立教育政策研究所 平成17年3月)
- ・ 「わかる授業の創造」(木川 達爾 ぎょうせい 昭和53年)
- ・ 「自己評価による学び方の深化」(石川 勤 明治図書 1976)
- ・ 「自己評価」(安彦 忠彦 図書文化 1987)
- ・ 「自己を育てる」(梶田 叡一 金子書房 1996)
- ・ 「授業の工夫改善につながる学習評価 自己教育力を高める自己評価活動の在り方」(中村 隆 「平成14年度研究紀要」京都市立永松記念教育センター)
- ・ 「やさしい教育心理学」(鎌倉 雅彦, 竹綱 誠一郎 有斐閣 2005)
- ・ 「教科と総合に活かすポートフォリオ評価法～新たな評価基準の創出に向けて～」(西岡 加名恵 図書文化社 2003)
- ・ 「総合と教科の確かな学力を育むポートフォリオ評価法『対話』を通して思考力を鍛える!」(宮本浩子 西岡加名恵 世羅博昭 日本標準 2004)